

患者の動きに強いMRI

米パロウ神経学研究所は、診断中の患者が動いてもきめ細かな画像を撮影できる磁気共鳴画像装置(MRI)を開発した。子どもやパーキンソン病患者など、診断中じっとしているのが苦手な患者の診断に役立つという。

新MRIは、患者の動きを追いながら画像を撮影するので、診断中の患者の動きにあまり影響されずに高精度な画像を得ることができると見つけたい。小さな脳梗塞(こうそく)も発見しやすくなり、早期治療が施せるようになる。

ひまわりでエイズ治療薬も

ドイツのボン大学は、ひまわりからエイズウイルスの増殖を防ぐ物質を発見した。「DCQA」と呼ぶ物質で、エイズ治療薬の候補物質になると期待される。安く大量生産できる可能性があるという。

研究グループはひまわりの茎を腐らせるカビに耐性を持つ株が放出する物質の中にDCQAが含まれることを見つけた。今後DCQAを合成する時に働く酵素の遺伝子を突き止めて、安価な人工合成に道を開きたい考え。

犬ががんを見つける？

米パインストリート財団、ポーランド科学アカデミーなどの研究グループは、犬ががんをかぎ分ける能力があるとの実験結果を発表した。がん患者の息をかぐと座るよううに訓練した犬に、乳がんと肺がんの患者と健康な人の息をかかせた。その結果、がん患者を八八・九七%の確率で識別できた。今後、この検査方法を他のがん診断法の結果と組み合わせれば、がん診断の精度を高めるのに役立つのではないかと研究グループは期待している。

実験では五匹の犬を三週間訓練したのち、八十六人のがん患者と八十三人の健康な人の呼吸を試験管にとってかがせた。犬は極めて微量のにおい成分をかぎわける能力があるとされ、これまでもメラノーマ(悪性黒色腫)という皮膚がんやぼうこうがんをかぎわけたケースが報告されている。